

# 1. 様々な立場から

疫学・公衆衛生学の講義を大学・専門学校で担当し、森林療法の導入を考える診療所の内科医師  
竹村医院レディスクリニック（兵庫県西宮市）・内科医師  
関西福祉大学看護学部非常勤講師・平野（竹村）文男

## 1. はじめに

私は診療所に勤務する内科医師である。保健・医療・福祉の人材育成に興味を持っていたところ、偶然にも2004年から専門学校・大学にて非常勤講師をする機会に恵まれた。そして2008年からは、従来から興味があった公衆衛生学の講義を担当するようになった。また、かつて園芸学部を卒業したこともあり、森林を用いて人間の健康を改善しようとする試み〔森林療法〕に興味を持っており、今後の導入を考えている。今回は、多彩なバックグラウンドを持つ立場から地域包括ケアシステムとヒューマンケアについて、考えてみたい。

## 2. 地域包括ケアシステムとは？

「地域包括ケア」とは、「要介護状態になっても、可能な限り、住み慣れた地域や自宅で生活し続け、人生最期の時まで自分らしく生きたい」と望む人が、医療や介護など必要なサービスを受けながら、在宅で自立した生活を続けられるように、地域ぐるみで支える、という考え方である。そしてこの地域包括ケアを実現するための「しくみ・体制」が、「地域包括ケアシステム」である。

## 3. 疫学・公衆衛生学を講義する立場から

現在、私が関西福祉大学で担当している疫学は、公衆衛生学のツールの1つである。その公衆衛生学は、保健・医療・福祉の行政の考え方も扱う。ここでは、行政の立場から地域包括ケアシステムとヒューマンケアについて、考えてみる。まず日本の今後の人口構成の予測であるが、今から15年後の2030年には、65歳以上の高齢者は3,684万人で総人口の31.6%（2012年現在では3,082万人で24.1%）、また75歳以上の後期高齢者は2,278万人で総人口の19.5%（2012年現在では1,522万人で11.9%）になると予測されている。この急速に進む高齢化の中でさらに、75歳以上人口の増加が中心となる。この後期高齢者の保健・医療・福祉の問題をどのように解決していくのが、今後の日本の重要な課題と思われる。「地域包括ケアシステム」という概念は、この重要課題の解決策として登場してきた。国の財政が厳しさを増す中で、今後はこの方向に行かざるを得ないように思われるが、効率重視におちいらないようにするためには、ヒューマンケアの考え方が重要であると考えられる。

## 4. 診療所の内科医師としての立場から

今後、ますます診療所と病院との連携が重要になると思われるが、診療所の機動力を生かして、地域包括ケアシステムを構築し、よりよいものにしていくことが診療所に勤務する医師の役割と考える。そこでも、ヒューマンケアの考え方をベースにすることを忘れないようにしたい。

## 5. 森林療法の導入を考える内科医師としての立場から

森林だけでなく植物（園芸も含む）、温泉、海洋などの自然環境による疾病予防の効果のエビデンスが徐々に蓄積されており、今後は地域包括ケアシステムの一環として地域の自然環境を生かした取り組みがなされていくと思われる。自然環境に恵まれている兵庫県、岡山県での森林療法をはじめとする自然療法の導入は、工夫次第では難しくないと思われる。自然環境を大切に扱う考え方は、ヒューマンケアに通じるものがあると思われる。

## 6. おわりに

ヒューマンケアも地域包括ケアシステムも、多くの種類のニーズに応えるためには、常に進化していくことが重要である。すなわち、新しい考え方により新しい方法をつくり、取り入れる必要がある。そのためには、保健・医療・福祉にかかわるすべての人々が自分の頭で考えること、また異なる考え方と出会うことが重要になる。そのためには人と人とのつながりが重要であり、それには日本だけでなく諸外国の人々との交流も重要になると思われる。